

雑 録

戦 時 下 ド イ ツ の 旅 行 談

(日本鐵鋼協會昭和 16 年度第 6 回講演會講演 昭 17. 1. 28 東京)

西 村 啓 造*

旅程と目的

1 昨年の 9 月末に東京を出発致しましてシベリヤ經由でドイツに参りました。さうして昨年の 9 月までドイツに居りました。獨逸戰の爲にシベリヤが通過出来なくなりまして、歸り途に非常に困りましたが、結局海軍の視察團の御一行の歸りに参加させて戴きまして、ドイツからスキス、フランス、スペインを通つて、スペインからスペイン船に乗りまして南米ブラジルに上陸致しました。この間 30 日を船の上で過しました。大體スペインからブラジルに行くには 15 日位で行ける所ですが、途中トリニダットといふ英領の島がありますが、そこに寄港を命ぜられたのであります。さうして英國の官憲から 4 日間に亙つて色々調べられたのであります。その中船中のドイツ人で非常な大金を持つて南米に行く人があつた。それが南米でドイツの爲に何か活躍するといふ風に見られて、遂に下船を命ぜられた。私共日本人も十數名居りましたが、特に吾々の荷物は嚴重に根こそぎ調べられたのであります。幸ひに私は重要な書類圖面等は特殊な方法を講じて居た爲に没收を免れましたが、ドイツに於ける空襲の効果等につき訊問を受けました。但當時は日米會談前のことであつて、イギリスは何とかして日本を自分の方に惹きつけて置きたいといふやうな氣持のあつた時であつたので、色々調べましたが、態度も言葉も丁寧であるし、イギリス人の老獪といへば老獪ですが、外交的に考へればまあ上手と言はなければなりません。やることは随分徹底的にやるが、人の感情は餘り害しないといふ風にやつたやうに思ひます。特に私が訊問を受けた時などは、「日本はクリスマス前に樞軸側を脱退して英米側につくといふ評判があるが、君はどう思ふか」といふやうなことを聴いたりしたことがありました。トリニダットでさういふ風に 4 日間費し、それから二三日してから今度は蘭領のキューラソーといふ港に油を積みに入つた。そこで又調べられました。これは前のトリニダットと關係をつけて調べて居るらしい。又船にも間諜らしい者が居つたので今度は多數の人が下船を命ぜられた。例へばチリーの外交官で、ハンブルグで長く領事をして居つた親子 3 人が居ましたが、それらも遂に下船を命ぜられた。その他ルーマニヤの公使が下船を命ぜられた。併しそれは出帆間際に戻つて來ましたが、そんなやうな人が 20 名餘りも出て、誰も彼もが蒼くなつて居つたのであります。その時日本人には調の手が廻らないで、不安の中にも悦んで居つたのであります。出帆間際になつて特に私を呼出しに参りまして、愈々日本人に番が廻つて來たといふので緊張しました。私は荷物を調べられましたが、併し既にイギリスの官憲に調

べられた後でありますから、格別危いものもなく、言ひ懸りもつかなかつたので許されました。併し船の下には自動車を持たして居つて、何時でも連れて行く積りで調べられたのであります。そんなことをしてそこで又 3 日も費したのであります。それですから 15、6 日の航路を 30 日も掛つて南米に着きました。南米の首府リオ・デ・ヂャネイロに行きまして、そこから海軍の御用船であつた大阪商船の船に乗せて貰つて南米の南端を廻りました。普通はマゼラン海峡を通るのであります。人眼を避ける爲に更にその南のケープホーンを通りまして、何處にも寄港せず日本に向つて直航して歸つて参りました。リオ・デ・ヂャネイロを出發してから横濱に着くまで 45 日掛つて居ります。12 月 8 日はウエーキ島の爆撃がありましたが、丁度その同じ時刻には私共の船はウエーキ島の南 60 哩、委任統治領との間を通つて居りました。前から栗栖大使がアメリカで活躍されて居ることは船にもニュースが入つて居りまして、或は歸るまでは戦争はないかとも思ひながらも來たのであります。愈々ウエーキ島で戦争にぶつかりました。船の側でも何時でも下船の出来るやうにボートには食糧を積んだり、カバーを外したり、又船はすつかりねずみ色に塗變へ、大阪商船の大的字も消し、日の丸も隠して、外部との連絡を絶つて本當にこつそりと歸つて來たのであります。さういふやうに、回顧すれば愉快であつたが、中々危険な又苦しい旅行をして來たのであります。

私がドイツへ参りました用件は私共の會社でやつて居ります航空機用の輕合金の技術に付てドイツの或る有力な會社と技術契約の締結にありました。此契約に依りまして今實習生を向ふに 3 人送つて居りますが、これはまだ歸らないで向ふに残つて居るのであります。先般この話を或る方に申上げたら、日本の飛行機は今までアメリカで最も優秀だと言はれて居る飛行機と闘つてどんでん勝つて居るから、何もそんなものを外國から習ふ必要はないではないかといふやうな御批評を受けたのですが、併し飛行機が戰鬥に勝つ爲には、飛行機の質もありませうし、操縱の問題もありませう。確かに操縱の點に於て日本が優秀であることは問題がない。又出來上つた飛行機に於て遜色がないと私は信ずるのであります。飛行機の材料に於ても日本は決して遜色がないのであります。一例を申せば、日本ではデュラルミン、超デュラルミン、超々デュラルミンを使つて居る。ドイツでは今日はデュラルミンと超デュラルミンを使ふ程度で、日本のやうな超々デュラルミンはまだ使つて居ない實情であります。それには事情もありまして、ドイツは飛行機的大量生産を目標として居る爲に、一度設計して

* 古河電氣工業會社取締役金屬材料部長

も、それを工場生産に廻す場合には更に製作圖面に書直す、その際に材料に付ても、或は形に付ても或る程度の修正をして、平凡な材料で何處でも出来るものを澤山作るといふやうな様式に大體なつて居るやうでありますから、材料にしてもさう奇抜なものを使はないのであります。それで超々デュラミンも使つてゐないやうな風であります、その點から見ても出来上つた材料に於て日本が必ずしも劣つて居るとは思はれない。併しながらその材料の作り方、即ち板なら板、棒なら棒、プロペラならプロペラといふ形を作るまでの工程に於て遺憾ながら彼の方に一日の長がある。機械を能率よく使ひ、少い人で、少い資源で、澤山の製品を出すといふやうな生産技術に於て吾々が一步を譲る所があると考へたのでその技術を向ふから採入れ、目下、最も要望せられて居る生産力の増強の一端に供したいと思つて居る次第であります。その技術の内容に付ては只今まだ御報告を申上げる時期でないのであります、本夕はその點は御許しを願ひまして私の滞獨中、見聞致しましたことに就て少しくお話を申上げたいと存じます。

二つの質問

私がドイツに於て交渉をして居る當時先方の會社から御馳走になつたことがあります。その時先方の専務が、「君は久し振りにドイツに來たのであるが、何かドイツに來て不思議と思ふことはないか」と問はれました。私も即席であつたので澤山の質問を持合はせなかつたのですが、「差當り二つある。一つはドイツの人は音楽にしても、建築にしても、美術にしても立派なものがある。然るに料理に至つては頗る下手ではないか。今夜の御馳走は特別旨いが、一體にドイツの料理はまづい。これはどういふ譯か」と質問しました。専務は答へて、「今は戦争中で材料がないからまづいのは當り前ぢやないか」かう簡単に答へました。それからもう一つの質問は、「ドイツは貧乏を看板にしてゐるが、今度來て見ると工場は擴張されてゐるし、自動車道路は出来てゐるし、立派な建築は出来て居るし、その上イギリス、フランスを相手にして大戦争をするだけの力が出来てゐる。それは一體どうして出来たのか」かうまあ尋ねました。それに對しては、「ドイツは金はなかつたけれども働く力があつたのだ」かう簡単に答へました。この二つの答が今から思ふと大變適切な答であつたと思ふのであります。その當時には私はまだ本當に合點が行かなかつたのであります、色々のものを見聞したり、人の意見を聽いたりする中に稍その意味が分つたやうに思つたのであります。これを今夕お話しして見たいと思ひます。

獨逸料理

先づ何故ドイツの食物はまづいかといふことですが、ドイツの食料の中で肉は切符制で、1週間に400gに限定されて居ります。戦前は普通1週間1kgがドイツ人の常食であつたのであります。戦争が始まると同時に500gに減り、今は更に400gに減じたのであります。400gの肉と申しますと、小さな牛鍋の2人前位しかありません。西洋料理で肉がないといふことは大抵まづいといふことに即斷出来るのであります、その上にバター、チーズ其他の食料油脂がない。戦前ドイツは160萬の食料油脂を使用してゐましたが其内100萬は國産で60萬は輸入であります。開戦と同時にドイツは切符制度によつて食料油脂の

使用を半減したのであります。それですから料理はまづい譯であります。そこで今は魚を努めて輸入して食べて居る。所がその魚は大體北海から來る魚でありまして、鰈或は鱒、鱈、そんなものが食膳に上つて來ますが、その北海の魚といふものは不味いのであります。それは食道樂の話に依ると北海は御承知の通り寒い所である。水は冷い。光線は乏しい。それですから海の中に魚の餌になるやうな微生物が少い。榮養不良の魚であるから結局不味いといふ事になるのであります。然らば野菜はどうかと申しますと、これも農業専門家の話に依ると、ドイツの平均温度は日本の平均温度より6°低い。百姓の常識に依れば、5°低ければ收穫は半分しかないといふのださうです。それだけ乏しい光線、乏しい熱の下にある。それからドイツの雨量は日本の1/3ださうであります。雨が2倍降れば作物は2倍出来るといふのが大體百姓の常識ださうであります。日本は3倍降るから3倍出来る譯であります、その中には洪水等の影響もありませうから、まあ大雑把に考へて2倍位出来ると考へてよいのであります。それから地味が悪い。ドイツには耕作に適しない地が多いのであります。斯様に條件が皆悪いので、ドイツの百姓は日本の百姓のやうに小さな耕地面積では立行かないので、平均1戸當り16町歩の耕地を持つて居る。日本では1町歩以下であります。その位悪い條件の下に百姓は仕事をして居るのであります。さういふ所で出来る野菜ですから、野菜も不味いと私は即斷して居るのであります。さういふやうに食糧はどれもこれも乏しかつたり、まづかつたりであります。ドイツ人はさういふまづい貧乏な國に親子代々育つた故でありませう。子供の時から家で料理が不味いとか云つて食べ残すと、ひどく親から叱られるといふやうな教育を受けて居る。ドイツ人は料理をすつかり食べて、残つた汁までパンに浸まして吸取つてしまふといふやうな食べ方をして居ります。日本の禪宗の坊さんのやうな食べ方を致します。それであるから不味いの旨いといふことはもう言はないことにして居るのではないかと、それで料理法も發達しないから不味いのだ、かういふ風に私は考へたのであります。

獨逸の立直り

第二の問題の、ドイツは如何にして立直つたかといふことは、専門の方々から色々御報告のあることですが、私の感じたり、見たりした點に就て述べさせて戴きます。先づ生産設備であります、ドイツの有力な工場、會社は大體70年位の歴史を持つて居ります。日本のさういふ方面に比べると約2倍の歴史を持つて居る。その間にドイツ人特有の科學的研究をやつて居るので、技術もその間に養はれて居る。設備もその間に蓄積せられて居る。それが大きな力を成して居ることは誤りない事實だと思ひます。特に前大戦に於て外の國は工業力を傷められた所もありますが、ドイツは少しも工場を傷められず、却つて擴張したといふやうな事情にあつたので、この點がドイツの強味であります。それから次の生産要素、勞働力、これもドイツには立派な體格を持ち、さうして鈍重で、命令をよく守り、何年でも同じ仕事に飽きないといふやうな理想的な勞働者が澤山居ります。前大戦後の不況時代には失業者が600萬人もあつたのであります、ヒトラーが政權を取つた當時の一番の急務は、如何にこの失業問題を緩和するかにありました。御承知のやうな自動車道路を作つて、勞働

獨逸の現状

その次はドイツの現在の模様について少し申し上げたいと思ふのであります。先づ物資から見てドイツはこの戦争に耐へるかどうかといふ事に就てのお話を申し上げます。これに就て日本の有力なる筋の御調査であります。それを御紹介して見たいと思ひます。但これは獨逸の始まる直前の調でありまして、その後の状況は分かりませんが、只今申し上げることから多少御推察は出来るかと思ふのであります。

先づ鐵について申し上げますと、鐵鑛資源は國內から 1,000 萬 t 出る。佛蘭西から 3,500 萬 t、瑞西から 2,000 萬 t、その他の國から若干出まして、合計 7,500 萬 t の鐵鑛があるさうであります。これから出来る鋼が 3,700 萬 t、平時の需要は 2,500 萬 t とは言はれて居りますから、戦争中と雖もまだ餘力があるのではないかと思ふのであります。

石炭は 1937 年の統計に依りますと、黒炭が 1 億 8,450 萬 t、褐炭が 1 億 8,470 萬 t、合計 3 億 6,900 萬 t、それに昔のチェッコから 3,500 萬 t、白耳義から 3,000 萬 t、それから獨逸の支配に歸した波蘭から 2,000 萬 t 出まして、合計 4 億 5,000 萬 t の石炭が出る。それでこれは國內需要を充して餘りがあつて、今も伊太利、或は瑞西等に輸出をして居るのであります。

石油については、國內産としては舊波蘭から 130 萬 t 出ると言はれて居る。人造石油は色々な見方があるが 300~400 萬 t と見て居ります。それから輸入する天然石油が 400~500 萬 t で、合計 1,000 萬 t の石油がある。右の石油の中で人造石油は只今 300~400 萬 t と申しましたが、人に依つては 260 萬 t といふ人もあり、又大きく見る人はこれを 900 萬 t とも見居るのであります。輸入石油の資源としては羅馬尼が年産 670 萬 t でありまして、その中ドイツが 400~500 萬 t 輸入すると見て居るのでありますから、先づ可能性は十分あると思ひます。それからソ聯から獨逸戦前には 650~700 萬 t の産出があつたのであります。それらを合せて獨逸の入手する石油は 1 ヶ年 1,000 萬 t でありまして、決して潤澤といふ譯ではないが、普通の場合には先づ足りる、大軍事行動を起す場合には勿論足りないのであります。普段のものを貯へて置いて、足りぬ場合にはそれを使ふといふことで凌いで居るのであります。尙人造石油の増産には努めて居ると思ひます。

それから亜鉛は波蘭の産出額で十分賄つて行けるのであります。又ボーキサイトも十分あるのであります。それからマンガンはソ聯から輸入して居つたのであります。これが今の關係でどうなつて居りますか、今日の實情は分かりません。水銀、硫黄は伊太利から輸入して十分である。銅はユーゴスラビヤ、諾威、瑞典、芬蘭等から輸入して居りますが、十分でないであります。ニッケルはソ聯から仰いで居つた。錫、コバルト、タングステン、モリブデン等はマレー方面から産出したものを日本の手を通じて輸入して居つたのであります。最も困つて居つたものはタングステンとコバルトでありまして、今までの貯藏品、占領地帯からの鹵獲品で間に合はして居るのだと思ひます。

それからゴムであります。1938 年度に於ける生ゴムの輸入量が 10 萬 t、1939 年の人造ゴムの生産量は 1~4 萬 t であつた。此合計 14 萬 t 位では十分でないのでありまして、人造ゴム

力をそちらへ振向けたり、或は青年子弟を奉仕労働に従事させ、普通では經濟の立たぬ耕作地を開墾させるとか、土木工事をやらせたり、或は結婚獎勵をして女を早く家庭に退かして労働市場への壓迫を緩和した。或は都市に餘り労働力が集まらぬやうに農業を保護して歸農させるといふやうなことをするとか、色々なことをやつて成功したのであります。それらは單に失業問題の緩和だけでなく、他により以上の目的があつたことは事實であります。併しそれだけ澤山の労働力があつたといふことが一面には苦痛であつたかも知れぬが、要するにそれがドイツの力であつたのであります。左様な生産設備と技術、それから労働力が具つて居つた。唯無いものは金であつた。物資であつた。その問題をどう切抜けたかといふことであります。この點について私は正金銀行の方で向ふに長く居られた、さういふ方面の權威者に御意見を伺つたことがあります。その方は「ヒトラーといふ人は此方面から考へても洵に幸運な人である」と申されました。その意味は、「第一、前大戰の時にドイツもイギリスもフランスも内外共に澤山の國債を發行したことは事實である。所がドイツに於ては戰後に來たインフレーションの關係で内債は片付いて仕舞つた。フランスとかイギリスは内債が片付いてない。向ふではそれが痛であつたが、こちらでは財政上に何等の壓迫もないといふ状況になつて居つて、インフレーションのお蔭で國民は苦しんだが、ヒトラー政権に對しては非常に有利なことで、これがヒトラーの幸福であつたといふ所以である」とかういふのであります。次に外國に返す金はどうしたかといふと、ドイツには金がなかつたもので金利が非常に高くなつて、一時 1 割とか 1 割 5 分とかいふ金利を拂つて居つた。それであるからアメリカあたりからは澤山の投資があつたのであります。又ベルサイユで課せられた償金を拂はないから外國から金を與へてドイツに仕事を與へて償金を取れといふやうなことで金を貸したこともある。それらの金をドイツはどう使つたかといふと、やはり又生産設備、交通機關といふやうなものに固定させてしまつた。それで愈々向ふから金を取立てに來た時分には、1928 年のアメリカ恐慌の時にドイツから金を取立てようとした。ドイツの金は皆生産設備に固定せられて居るので持つて行けない。仕方がないからドイツに原料を與へてその製品を取るといふやうなことをするより仕様がな。結局ドイツに仕事を與へたのであります。又ドイツは他の國々と物々交換の貿易を取組んで原料を輸入して製品を輸出することにした。斯様にしてドイツの工業はどんどん仕事が出来た。さうして所謂失業問題も解決してしまつたのであります。此外御承知のやうに統制經濟をやつて、乏しい物資で工業の運用をやる。或は金融統制をやつて、少しの金でも轉回を早くして利用するといふやうなことをして今日に至つた。これらを考へると、「春秋の筆法を以てすればドイツを今日あらしめたものは英米であるといつても差支ないのだ」かう言つて居られるのであります。これを例に取つて考へて見ると、丁度相撲取が大怪我をして出血して、一時危篤に陥つたが、輸血をして貰つて、その後の養生の宜しきを得て、元の儘の相撲取に戻つたといふやうな状況であると私は思ふのであります。如何にヒトラーが偉くても、それらの要素がなくてかう短日月にドイツが大きく強くなれないので、素のあつたものを養生法を旨くやつたのがヒトラーの成功だと、かう私は考へて居るのであります。

の生産に努めて居るのであります。特に現在ゴムの輸入が杜絶して居るとすれば非常に困つて居ると思ひます。

食糧に付ていふと、パンに使ふ穀類の年需要額は 1,100 萬 ι でありまして、1938 年の年産額が 1,400 萬 ι であります。ですからパンは充分と見られます。それから獨逸人は馬鈴薯を澤山食べますが、この年産額は 6,000 萬 ι の中で、人間の食ふのは 1,500 萬 ι 、あとは畜類の飼料にしたり、アルコールを造つたりするので、馬鈴薯だけは澤山あります。肉類は國內の需要が年 3,800 萬 ι であります。國內の生産は 3,500 萬 ι で、300 萬 ι 輸入して居つたのであります。所が輸入は出来ないし、牧畜飼料は輸入しなければならぬといふ事情にあるので、非常に苦痛を感じて居りまして、先程申しましたやうに、戦争が始まると同時に肉の使用量を半分減らしまして、1週間 500g、その後引續いて 400g といふやうに制限をして居るのであります。それから油脂、先程まづいふやうに食料油脂のことを申しましたが、平時食料油脂の年需要量が 160 萬 ι 、その中國内で出来るものが 100 萬 ι で、60 萬 ι の輸入をして居つたのであります。戦争が始まると同時に政府は牛を飼ふ數を減らさないやうに色々努力したり、牛乳の使用は供と病人に制限して、成るだけ澤山バターを造るやうに努めて居るのであります。現在出来る食料油脂の生産量は約 80 萬 ι でありまして、普段の食料油脂の需要量の丁度半分にしか當らぬのであります。これらの數字から御覽を願ひますと、ドイツの物資の状況は、多少の例外もありますけれども、鐵、石炭、石油といふやうな直接工業及び戦争に必要な資源はまあまあ大丈夫であります。食糧に付ては苦しいのであります。獨逸は戦争に對して萬全の策を圖つた爲に戦前から食糧問題に付ても考慮を拂つて居て、切符制度なども前から計畫せられ、宣戦布告の翌日から直ぐ食糧切符でやつたといふやうな實情であります。さういふ風に獨逸全體からいへば食糧問題でも持久戦が出来る覺悟をして來たのであります。佛蘭西、丁抹、諸威、波蘭と澤山の周圍の國を征服したのでそれらの國の人を養ふ義務が出来たが、その國々の食糧問題までは考へなかつたらしいといふのが事實らしいのであります。歐羅巴全體としてはどうしても食糧は負の國で、何がしか何處からか入れなければ足らぬのであります。獨逸は自分の國だけは兎も角、歐羅巴全體としての食糧問題に苦しんで居ると思はれるのであります。それが獨逸がソ聯と戦争を始めた1つの大きな原因ではないか、ウクライナの豊庫を狙つたのではないかと言はれて居るのであります。

それから工場の生産能力ですが、一々のことは申上げられないのであります。多くの工場を綜合していふと、獨逸は今次の戦争状態にあつてもまだ全裝備を 24h 全部働かせるといふ所までは行つて居ないので、見方に依つては全能力の7割、或は8割位しか仕事をして居ない。まだまだ底力を持つて居ると見てよいと思ひます。唯困ることは人的資源であります。現在獨逸が召集して居る兵隊は幾らあるか分りませんが、少くとも 1,000 萬は超えて居ると言はれて居ります。獨逸の人口 8,000 萬、男女半々として、男 4,000 萬、その中の 1,000 萬でありますから、國內の勞働力といふものは非常に不足だといふことは明かであります。電車に乗りましても車掌などは女でやつておりますが、工場に行きましても、獨逸以外の歐羅巴の國々から澤山の勞働者を入れて、假小屋に住まはせて工場に入れて居る。私が暫く出入して居つた或

る會社の如きも十二三ヶ國の人間が入つて來て仕事をして居るのであります。それが爲にどうも能率が上らぬといつてこぼして居ります。捕虜も澤山來て居りますが、これは道路修繕とか、掃除といふやうなことを主としてやつて居りまして、工場には入つて居らないやうであります。戦争が始まると同時に所謂贅澤工業といふか、直接に戦争に必要なでないやうな工業は殆ど押へつけてしまつて、専ら戦争に勝つことを目標にやつて居るのであります。隨て街を歩いて買ひたいものでも得られないものが澤山あるのであります。例へば靴を買はうと思つても靴もない。或は寫眞機でも、極く安いものはあるのですけれども、高級な寫眞機は國內では賣らせないといつたやうに、吾々旅行者に痛切に感ずる問題は多々あるのであります。

空襲

皆様からよくドイツに於ける空襲の状況について聽かれるのであります。冬の夜の長い間は殆ど毎晩のやうに英吉利からやつて來ました。夏は御承知のやうに伯林附近では晝が長く、夜は 10 時頃まで明るい。朝も 4 時位から明るくて、明るい時間が多い。その上ドイツの航空勢力が旺盛ですから、明るい時には英吉利からよう來ないのですが、冬の夜の長い時は殆ど毎晩のやうにやつて來ました。併し非常に高い所から眞の闇の所を盲爆するのでありますから、必ずしも工場がやられるとか、軍事施設がやられるといふことではなくて、全くの盲爆であります。私の承知して居る限りで工場のやられたのはキール軍港の工廠などのやられた話を聞いて居ります。或はハンノーバーのエーデルスタールの鋼工場の話も聞いて居りますが、エツセンなどのクルップの所在地に來ましても、エツセンは土地の關係上一向來ないといつて居ります。又ゾーメンスに度々参りましたが、空襲らしいものに遭つたことがない。何か工場の隅に一遍落ちたことがあるといふやうな話です。伯林の街にも隨分來てやりましたが、殆ど重要な所をやられたといふやうなことはなくて、停車場に一遍落ちて一寸混雜を來したといふやうな程度のものであります。街としては漢堡、ブレーメン、ケルンとかいふやうな敵軍に近い所がやられて居ります。私はケルンに参りましたが、隨分やられては居りますが、御承知のやうに獨逸式の家ですから、彈の中つた一部分が破壊するだけで、全體の家の形は残つて居つて、火事になつても大火事になる譯ではないのですから、全體的に見れば空襲の効果といふものは極く輕微のものと私は思ふのであります。まあ空襲が少々來た所で、獨逸の國力を疲弊させるといふやうなことは到底思ひも及ばないのであります。

ヒットラーの人氣はどうかと申しますと、此人に對する國民の信望は非常に厚いものがありまして、これは貧乏搖ぎもしないものと思ふのであります。この勢ひで行けば必ずドイツは勝つと思はれるのであります。

獨逸の將來

それでは次にドイツは將來どうなるかといふことの一端を申上げて見たいと思ひます。外交的にいふならば、日本が東亞共榮圈に於て平和を確立しようといふのと同じく、獨逸は歐羅巴と亞弗利加を含む共榮圈内に於て獨逸が牛耳を執つて、歐羅巴の平和を確立しようとして居るのであります。一昨年秋のことですが、

世界の將來の地圖が米國の華府の新聞に出たのを獨逸の新聞に轉載されて居りました。その地圖によりますと南北亞米利加を一つにした帶、歐羅巴亞弗利加を中心とした帶、露西亞の帶、東亞共榮圈の帶といふ風に、世界が四つ位に區分されて居ります。獨逸は要するにこの四つの中の一つの大將にならうといふのであります。さうして獨逸自身は重工業、軍事外交といふやうなものを握つて外の國を支配しよう、外の國はその國々の事情に依つて、或は農業を以て立ち、或は鑛産を以て立ち、或は漁業を以て立つといふやうに、その國々の經濟事情、或は國民の狀況等に應じた産業に依つてその國を立てさせ、さうして全體の自給自足經濟を略満足させるやうにして永久の平和を茲に確立しようといふのが獨逸人の理想のやうに窺はれるのであります。獨逸はさういふ風に考へて居りますが、先づ今度の戰爭でそれが一應成立することと思ひますが、果して將來何時までそれを持續して行けるかといふことになると、獨逸人の他民族に對する統治能力の問題もあり、又周圍の國が餘りに複雑であつて、日本が東亞の盟主として行くのよりは餘程氣骨の折れることでもあります。私はこれらの問題に付て考へる度に日本は有難い國であると感じざるを得ないのであります。第一日本の國の位置が非常に恵まれて居る。若し日本が獨逸のやうな狭い中に位して居つたら、吾々はもつともつと苦勞しなければならぬだらうと考へます。それからもう一つ更に有難いことは日本の國體であります。ヒトラーは 8,000 萬の獨逸人の信望を擔つて居ると申しまして、ほんの 8 年か 10 年來のことであつて、日本の崇嚴な國體に較べればもの數ではないのであります。國體と國の位置に付ては日本といふ國は非常に有難い國であるといふことを痛感するのであります。

それから國內の問題で獨逸の將來はどんなことになるだらうかといふことの暗示を二三申上げて見たいと思ひます、その一つは住宅問題でありまして、一昨年(1933)の 11 月 15 日にヒトラー總統の名で以て戦後の住宅計畫といふものを告示したのであります。それに依ると幾らか將來が窺はれるのであります。それにはかういつて居ります。「戦後の經營上人口の増加を必要とするが、その爲に住宅問題を解決しなければならぬ。住宅は子澤山の家族を衛生的に生活せしめるのを標準とする。住宅問題は國家の問題として特別なる機關を設けて、その機關を總統に直屬せしめて實行する。年々建築する住宅の數は總統自ら決する。農業住宅、個人の建築等も考慮して便宜を圖る。戦後第 1 年後には少くとも 30 萬戸の住宅を建設する。建築及び經營は地方團體で出来ない場合には適當な擔當者に命ずる積りである。斯くして出來た住宅の家賃は人民の收入に均衡を得せしめるが如く決める。それから住宅を作る爲に土地の購入、或は交換といふやうなことは法律的に樂に出来るやうにする。」それから家に付てはかういふことをいつて居ります。「戦後の家は獨立した平家で、庭と職場と蔬菜園とを附屬させる。さうして戦後 5 年間に全住宅中 8 割は廣い臺所と 3 個の寢室、1 個のシャワールーム、總坪數を 32.6 坪にする。それから 1 割は前記よりも 1 室を増したものとし、1 割は 1 室を減じたものにする。」さういふやうに具體的に部屋の大きさまで規定して居るのであります。このヒトラーの告示と前後してライ博士といふ大臣が戦後の社會問題に就て演説を致しました。新聞に依つて私はそれを見たのであります。先生の演説に依つて

も獨逸の社會問題の將來が窺はれるのであります。それを御紹介して見ますと、「今度の戰爭に依つて獨逸が勝つことはもう必然である。この戰爭に當つて獨逸の勤勞階級の人が非常に國家に奉仕して呉れた。それに酬ゆる爲に獨逸は戦後斯様な社會問題を實行する積りである。」かういふのであります。先づ養老年金のことをいつて居りまして、「勞働者、月給取、農夫、家庭工業者たるを問はず、老後にはその人が過去に於て國家に貢獻したる程度及び將來何をなし得るかを評價して適正なる補給を受ける。老人があつたからといつて若い家族の生活を壓迫しないやうにする。」かういふことを述べて居ります。その次には「健康保持の爲には凡ゆる角度から研究し、革命的な法律を出す積りである。」その次は「慰安施設も既に行はれて居るが、仕事に従事する人が時々その施設を利用することは各人の義務である。」かう申して居ります。曾てオリンピックを日本に招致しようといふ計畫の時に獨逸は例の「悦びの力」(K.d.F.)といふ團體で出來て居る遊覽船、それに獨逸の勤勞階級の人を満載して應援に寄越すといふ話がありましたが、さういふ遊覽船は今幾隻あるか知りませんが、戦後には百隻造るといつて居ります。或は海岸地帯に休養所を作つて一定期間働いた人が一定期間そこへ行つて保養する。さういふ休養所を戦後百ヶ所作る。それから安價な民衆用自動車を廣く使はせようとして居るのであります。その工場が出來掛けて居る時に戰爭になりまして、現在ではその工場では軍需品を作つて居るのであります。戦後は此の自動車工場を 1 年 300 萬臺にするといつて居ります。之等の施設の爲に 10 年間に 6,500 萬 MK の金を使ふといふやうなことまで具體的に申して居ります。さうしてそれらの設備を利用するのは権利のみならず義務であるといつて居るのであります。その次には「職業教育にも大いに力を用ふるであらう。」かういつて居ります。私は伯林の近郊にある職業教育の研究所といふやうな所を見せて貰つたのであります。大した施設はないやうでありましたが、併し行つて見ると理想は中々高く、先づ獨逸全體の人口統計が出來て居る。何歳の男が何人、何歳の女は何人といふ人口の統計が調べてある。その次は色々の方面から調べて、鐵は何處要る、パンは何處要るといふやうなことを出してある。さうしてこれだけの獨逸人を養ふには大工は何人、鍛冶屋は何人といふやうな大體の目標を立てる。さうすると獨逸の子供が小學校を卒業する時分に大體獨逸人全體の中で何パーセント大工になる必要があり、何パーセント鍛冶屋になる必要があるといふことが分つて居りますから、適性考査をして、それぞれの職業を選定してやつて、その決められた各々の職業に於ける教育を徹底的にやらうといふ意味の研究所であります。その職業教育に付て色々専門的に見れば非常に面白い材料が澤山あると思ひます。さういふやうな教育を將來更に力を注いでやるといふのであります。その次は給與の問題でありまして、「給與はその仕事の危險性、困難さ、責任、出來高等に應じて現在から見ると非常な變革を來すであらう。恐らく鑛山労働者が最も高級を取ることにならう。」かういつて居ります。その次は「戦後は職業選擇の自由も得られる。但已むを得ぬ場合には國の内外に必要な勞働力を振向けることも法律化されるであらう。」かういつて居ります。それからあとは住宅問題に付て先にヒトラーの告示にあつたことを繰返して申して居ります。大體戦後獨逸はこんな風に社會問題を考へて居るといふことが分るのであります。一面から考へれば

かういふ風にして労働者なり、勤勞者なりに前途の光明を與へなければ戦争に倦むといふ風にも考へられるのでありますが、彼等がかういふ理想を以て進んで居ることは間違ひのないことであります。

それからこれに關聯してもう一つ獨逸の社會事業の一端をお話し申し上げたいと思ふのであります。獨逸には昔から澤山の慈善事業が個人的に經營せられて居つたのでありますが、ヒトラーの考では、慈善事業などといふことは個人々々のお情などといふ生温いものではなくて、苟も一定の生活をする力のある者は弱者を扶けるのは義務であるといふ風に考へまして、今まで個人的に經營せられて居た慈善事業をすつかり止めてしまつて、さうして一つの組織にして、1人1ヶ月1MK以上の金を醸出する人は誰でも「N.S.V.」といふ團體の會員にする。それにはナチス黨であらうが、誰であらうが、その志のある者は會員にする。現在さういふ會員が1,500萬人ある。この1,500萬人といふことは獨逸の家族状態からいふと、2家族に對して1人の會員を持つといふことで、餘程徹底して居るのであります。それらの人が集める金と、其他冬期救濟事業等に依つて集める金と合せまして、1年に凡そ2億MKの資金を以て今までの個人的に行はれて居つた社會事業を全部吸収してしまつたのであります。さうしてどんなことをやつてゐるかとお申しますと、社會事業ですから先づ救貧事業をやる。私の見せて貰つた救貧事業の一例は伯林にある大きな衣服倉庫であります。吾々戦争になつて獨逸に行つても、洋服も中々出来ない、靴も中々出来ないといふ時に、その倉庫に行つて見ますと、男でも女でも、子供でも老人でも、シャツ、靴下、帽子、靴、乳母車まで、どんな形のものでも揃つて居るのであります。靴でも何萬足と並んで居ります。でありますから若し空襲に遭つて焼け出されたといふやうな人が隣組からの申請書1枚持つてそこに行けば即座に上から下まで新品で身を固めて出て來られる。或は空襲がなくてもこの人は本當に救つてやる必要があるといふ申請があれば、そこに行けば何でも自分の氣に入つたものが與へられるやうに出來てゐる。さういふやうな事業もやつて居るのであります。併し獨逸は1933年より1934年頃までは所謂失業時代で、貧乏人がうんとあつた爲にさういふ積極的の救貧事業が必要であつたのでありますが、今日の獨逸はもう猫の手も欲しい時代で、働く人は幾らでも要る。隨てさう貧乏人はない譯であります。そこで今日の社會事業團體「N.S.V.」の仕事の重點は積極的に將來第二の國民を如何に健全に育てるかといふことにあるのであります。その一二の例を私は見せて貰ひましたが、その一つは「母の家」といふのであります。私の案内せられたのは伯林郊外にある廣い野原の林の中に「母の家」といふ假建築が建つて居ります。さういふものが全國に澤山あるのであります。そこで

隣組から申請されて、この母親は子澤山の人で生活に疲れて居るから暫く休養を要するといふ申請があると、そこに連れて行きます。子供も連れて行くのであります。さうして自宅から朝行つて晩方歸つて行くのでありますが、往復の足賃まで盡く會で拂つてやる。やつて來ますと子供は子供で世話をする。大人は晝寝をしたり、遊戯をしたり、話をしたりして、三食を食べて遊んで行く。私の行つた所は40人程の母親が世話になつて居りましたが、20人の人がその世話をして居りました。さういふことを1月繰返す。さうするとさしに生活に疲れた母親も元氣を取返して、生活線に出るといふので勇氣を振つて家へ悦んで歸るのであります。

それから「母の學校」といふのが全國に500程あります。それは母に如何にして健全に子供を育てるかといふことを教へる所であります。田舎で學校の行届かぬ所には巡回講師を派遣する。その巡回講師は今3,500人居るさうであります。1つの村に1人の巡回講師が行くと毎日2h位話をしたり實地指導をしたりして10日間やります。さうして次々と巡回して歩いて、6週間經つと一遍ベルリンに呼戻して、又新知識を注入して出してやるといふやうなことをやつて居るのであります。それから育児所もあります。これも見せて貰ひましたが、労働者、或は月給取などが子供を預けて置いて働きに出る。さうすると赤ん坊から幼稚園に行く位までの子供を大勢集めて年齢に依つて分け、食事の世話から萬端やつて呉れるのであります。非常に衛生的にやつて居るやうに見受けたのであります。現在全國で32萬の託兒所があり、更に4萬増設中であります。少くとも1つの村には1つ以上の託兒所を作ることを理想だといつて居ります。

そんなやうなことをして、將來健全なるドイツ國民を作ることになつて居ります。ヒトラーといふ人は、自分は奥さんもなし、子供もないのでありますが、子供は好きと見えまして、到る處でヒトラーが子供をあやして居るやうな寫眞をよく見受けるのであります。ヒトラー總統官邸の地下室が非常に完全な防護室に出來て居るので、ベルリンではお産前の婦人はそこに收容して空襲に拘らず安全に子供が生れるやうに、特に開放して居るのであります。それから子供はどんどん殖えることを希望して、今では私生兒を生むことも恥でない。私生兒たることも恥でないといふ氣風に段々なつて居ります。獨逸が將來大いに伸びんとして居る心構へがよく窺はれます。

人間の數の問題と共に質の問題も考へられて居ります。所謂優生問題であり、血の純潔の問題であります。時間が參りましたので、これで講演を終ることに致します。御清聴を感謝致します。(拍手)